

## 資質向上をめざした特別支援教育教員養成の試み

～オンライン・ポートフォリオの活用を通して～

甲斐更紗〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター研究協力員〕・片岡美華〔鹿児島大学教育学部（障害児教育）〕  
雲井未歆〔鹿児島大学教育学部（障害児教育）〕・内田芳夫〔鹿児島大学教育学部（障害児教育）〕

### An attempt of special needs education teacher training to improve the quality of the students: Results the use of the Online Portfolio System.

KAI Sarasa・KATAOKA Mika・KUMOI Miyoshi・UCHIDA Yoshio

キーワード：オンライン・ポートフォリオ，自己評価，客観評価，特別支援教育，教員養成

**要約：**現在進められている特別支援教育の定着と充実を図るためには、特別支援教育教員養成カリキュラムや自己評価方法の開発、学生や現職教員の学習・研修に関する支援システムが不可欠である。A大学では、平成19年度から学習の蓄積を確認し、自己の成長と課題を確認するために有効なオンライン・ポートフォリオ評価技法の開発を行ってきた。結果、自分では自らの成長や身についた力などはなかなか気がつかないものであることが分かった。オンライン・ポートフォリオは、特別支援教育教員としての技能や知識の現状や伸びなどを評価することができ、自己成長へのモチベーションアップとしても価値を持ち、適切な指導や支援をするために有効であることが示唆された。

#### 1. 目的

平成19年度、障害の種類や程度に応じ特別の場で指導を行う「特殊教育」は、通常学級に在籍するLD・ADHD・高機能自閉症等の児童生徒も含め、障害のある児童生徒に対してその一人一人の教育的ニーズを把握し適切な教育的支援を行う「特別支援教育」へと転換した。これを具体的に実践する上で、教員には発達の特性や学習環境等、児童生徒一人ひとりの極めて多様な課題に的確に対応できる力が不可欠である（鹿児島大学・琉球大学・鹿児島県教育委員会・沖縄県教育委員会，2008）。

しかし、特別支援教育の現場においては、その教員が必ずしも専門的知識・技能を有しているとは限らず、手探りの状態で日々の実践に追われることもある。そのような状態では、多くの専門的課題を乗り切ることが難しい（福森・松田，2005）。

宮崎（2008）は、特別支援教育教員に求められている資質能力として、①障害に対する深い知識と技能、②保護者・本人との相談に関する資質・技能、③複数担任制のように、教員相互で連携・

協力して授業等をつくっていく資質能力、④地域や関係機関及び小・中学校等との連携協力関係を構築していく資質能力、をあげており、大学において特別支援教育教員に求められる技能などの育成を目指すためには、①から④を念頭においた系統的な育成プログラムを構築する必要があると述べている。

その一方で、大学教育学部特別支援教育教員養成課程に在籍する学生の実態として、深く学びたいと思ってもそのまま放ってしまう学生やどうしたらいいいのかわからないという学生が少なくないこと、障害のある子どもと関わる時に必要な特別な技能があまり身につけていないと感じる学生が多いことなどが明らかとなった（田中・神園・緒方・大沼・片岡・雲井・内田，2008）。

また、限られた期間で特別支援教育教員を養成するという事は容易ではない（片岡・田中，2008）ことから、大学を卒業した後も、自ら向上し続けることが求められる。たとえば、鹿児島大学ほか（2008）では、主に講義を通じた理論的知識の積み上げである「知る」ことと、教育実践

を通した経験知の積み上げである「生かす」として、省察を通した自己点検と課題の発見・解決である「気づく」ことを往還させることができ、これらを常に自ら点検し、向上に努めることができるメタ水準の資質が必要であると仮定し、自己点検・自己向上に向けての取り組みを行ってきた。

その支援システムの一つとして、ポートフォリオシステムがある。これは、学生が自らの学習に関して、目標設定と自己評価による主体的学習を進める支援ツールとして、また教員や学生支援スタッフによる指導助言の手立てとして本システムの活用が期待されるものである。これに関して、A大学では、平成19年度から、学習の蓄積を確認し、自己の成長と課題を確認するために有効なオンライン・ポートフォリオ評価技法の開発を行った。そこで、本稿では、オンライン・ポートフォリオを運用し、その効用に関する評価・検証を行い、今後の運用に必要な課題を明らかにすることを目的とする。

## 2. 方法

### (1) 対象

①評価対象者：A大学教育学部特別支援教育専攻学生61名（1年生15名、2年生15名、3年生18名、4年生13名）。

②評価対象期間：2008年10月から11月にかけて実施。

### (2) オンライン・ポートフォリオ実施手続き

一人あたり15分から30分ほどの時間で実施した。対象者は、各々パソコンによる評価入力を行った後、評価の結果が反映されたレーダーチャートを見ながらコーチング（フィードバック）を受けた。そのあと、評価の結果についてのコメントを入力を求めた。

### (3) オンライン・ポートフォリオ評価内容

理論に関する領域（教職および特別支援教育全般に関すること、特別支援教育の理念と制度に関すること、発達のプロセスとその障害に関すること、障害児の指導・支援方法に関すること）と、実践に関する領域（役割（職務）の自覚と遂行、指導の計画・授業実践、児童生徒との関わり、児童生徒の理解）についての自己評価（直感的な自己評

点、10段階評価による8項目）、客観評価（具体的問題に基づく評点）である。自己評価と客観評価は、ともに「教員としてスタートできる」段階を10と定めた。

## 3. 結果と考察

### (1) レーダーチャートの結果

1年生、2年生、3年生、4年生の中から、それぞれ学年において特徴的な事例を一つずつ抽出し、図1から4に示した。

①1年生：1年生において、各領域においてばらつきがある傾向がみられた（特徴的な1事例を図1に示す）。また、自己評価と客観評価の間に差がある傾向がみられた。1年生は理論に関する領域の「発達の過程とその障害に関すること」「障害児の指導・支援方法に関すること」が低い傾向

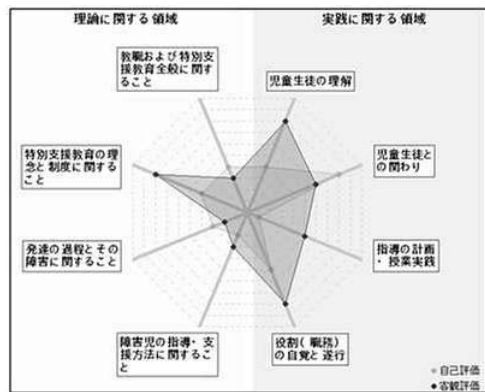


図1 1年生の例

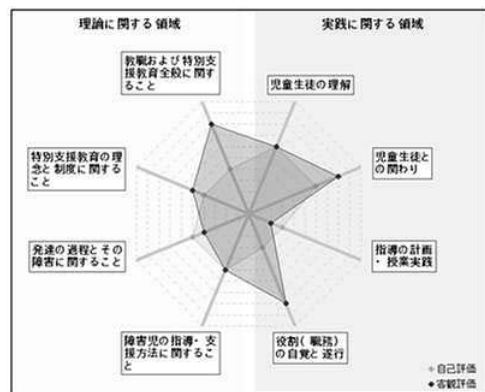


図2 2年生の例

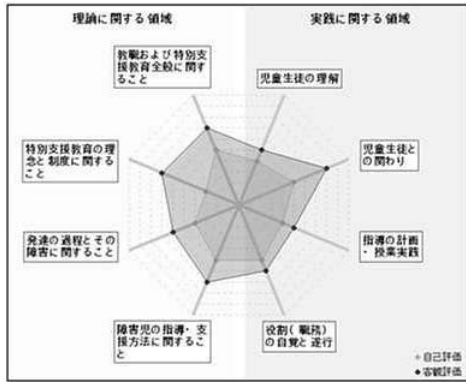


図3 3年生の例

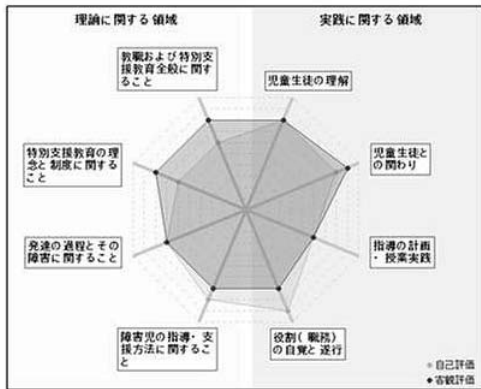


図4 4年生の例

がみられた。

②2年生：2年生も1年生と同様に、各領域の項目ごとに偏りがみられた（特徴的な1事例を図2に示す）。

自己評価では、実践に関する領域の「児童生徒の関わり」「児童生徒の理解」が高かった。

客観評価では、理論に関する領域の「発達の過程とその障害に関する事」「障害児の指導・支援方法に関する事」、実践に関する領域の「指導の計画・授業実践」が低い傾向がみられた。このことから、自分が学んだ内容、まだ学んでいない内容、など大きな偏りがあると考えられた。

③3年生：各領域の各項目も評価が上がり、円に近くなってきていた（特徴的な1事例を図3に示す）。

実践に関する領域の「児童生徒との関わり」がもっとも高かった。このことは、基礎免許状のた

めの実習経験が生かされていることを示唆しているのではないだろうかと推測される。しかし、自己評価と客観評価との差が依然として開いている状態であった。

④4年生：より均整のとれた形になる学生が多く（特徴的な1事例を図4に示す）、バランスよく力量をつけてきていることが示唆された。同時に自己評価と客観評価との差が狭まってきていた。しかし、理論に関する領域の「教職および特別支援教育全般に関する事」「特別支援教育の理念と制度に関する事」の自己評価と客観評価の差が他の項目より開いていた。4年次には、特別支援学校への実習（事前事後指導含む）があるが、図4から、実習を通して、知識（発展的知識）を身につける必要性が、より強く感じられていることが伺えた。

⑤全体像：図1から図4を全体的にみても、自己評価において、各項目とも、学年進行によって評点が高くなる傾向がみられた。指導計画・授業実践が低く、児童生徒との関わりが高い傾向がみられた。これは、授業実践への不安度を示していると推測される。その落ち込みは、4年生では小さい傾向であったが、これは、4年生において、特別支援学校での教育実習が影響を与え、授業実践への不安を小さくさせるという大きな効果があったことを示唆している。

客観評価において、理論領域に学年差、実践領域は学年間で類似していることが伺え、実践領域では、授業実践が特異的に低下していることがみられた。全体として自己評価が客観評価を下回る傾向であり、資質、特に授業実践に関する系統的指導に課題があると考えられた。

以上より、学生は、比較的厳しく自己を見つめていることが明らかになった。これは、学習に行き詰まった際に、自己評価が厳しくなったりすることと関連するのではないかと考えられる。市川・貫井（2002）は、自己評価自体は主観の問題であり、学生の性格や学習状況に大きく左右されると述べている。

そのことを考慮して、学生に対して、オンライン・ポートフォリオを活用した指導を行う必要が示唆された。

## (2) コメントの結果

学生がオンライン・ポートフォリオ実施後に入力したコメントを分析したところ、8つのカテゴリーに分類できた。それぞれのカテゴリーを「自己評価と客観評価の比較」「全体に関して」「分からないところの具体化」「理解の困難さ」「理由の省察」「ポートフォリオの活用に関して」「今後の取り組み」「今後の抱負」とした。さらに、学年ごとに分類し、表1、表2に示した。

1年生では、コメントに、「自己評価と客観評価との差に驚く」といったものが多くみられた。また、自己評価がかなり低いといった状況に驚くといったコメントも多くみられた。また、用語が分からない、評価項目の内容が高度といったコメントがあった。

今後の取り組みに関して、「もっと勉強して多くの知識を身につけたい」「積極的に子供たちと触れ合う機会を作って行きたい」「たくさんお話を聞きたい」「資料を集めて勉強したい」といったコメントがあった。これらは、前向きなコメントではあるものの、今後の取り組みについては漠然としたイメージであることが考えられた。

2年生について、1年生と同様に、自己評価と客観評価を比較して驚くといったコメントが多くみられた。しかし、1年生と異なる点としては、理由の省察に関するコメントがあることであった。例えば、「(自己評価が低いことについては)自分に自信がないことが原因」などである。このことから、ポートフォリオの結果を見て、なぜこういう形になったのか?と学生が自分なりに振り返って考えていることが伺えた。

また、これから頑張っていきたいという抱負ととれる内容のコメントがみられた。すなわち「まだ2年生で時間があるのでがんばりたい」「もっと自信を持って教職を目指したい」などといった、自信をもつことに関する抱負である。さらに、今後の取り組みに関しては、「指導の実践と計画に力を入れて学習に励みたい」「知識や理解を深めて、自分がどの段階まできているか把握したい」「授業以外にも学習の場を広げて、スキルアップに努めたい」などのコメントがみられた。1年生と比べて、やや取り組みの内容が具体的に

いることが言えた。

このことから、ポートフォリオによって、今の状態が目に見える形で表れ、今後の学習へのモチベーションが出てきたことが考えられた。

3年生においては、「発達の過程とその障害、児童生徒との関わり以外の項目において評価に大きく差がみられた」「特別支援教育に関する知識が身につけていない」などのコメントから、分からないところを具体的に把握ができつつあるように考えられた。

また、「これからの学習のよい目安になる」「今の自分に足りないものを理解できた」など、ポートフォリオを活用していることが伺えるコメントなどがあった。

4年生においては、項目や場面に沿った具体的な課題分析の内省ができており、「様々な知識があるが、整理できていなかったことが原因」「個人の実態を把握して、授業での的確な支援を考えることが難しかった」などのコメントがあった。これは、特別支援学校での実習経験(事前指導)を自己評価に結び付けて、ポートフォリオの結果について考察を深めていることが考えられた。

以上より、1年生は自己評価と客観評価の違いへの驚きを感じ、知識・理論に習熟する必要性への気づきと意欲が出たのではないかと考えられた。そして、2年生は、自己分析と自己理解の必要性への気づきが芽生え、自信をもって学修に望むことができたことが伺えた。

つまり、1、2年生は、今後の多くの学びに対して、また、自分の成長に対して期待を膨らませていることが推測された。

一方3年生は、「知識を実践に生かす」「実践に生かす知識を得ること」といった、理論と実践を往還するという省察がみられた。そして、4年生では、項目や場面に沿った具体的な課題分析がされ、教師として持つべき資質についての省察がされていた。

表1 要因に関するコメント

	1年生	2年生	3年生	4年生
自己評価と客観評価の比較	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己評価が客観評価と比べてかなり低い</li> <li>自己評価と客観評価の差が大きい</li> <li>自己評価があまりにも低い</li> <li>自己評価と客観評価がだいぶずれている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己評価よりも客観評価の方が高かった</li> <li>客観評価と大きな差がある</li> <li>客観評価が高く、自己評価が低かった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己評価と客観評価がけっこう違う</li> <li>客観評価が高い項目があった</li> <li>自己評価と客観評価の差が大きい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>客観評価より自己評価が高い部分もあった</li> <li>自己評価と客観評価がだいたい同じ</li> <li>評価が比較的高かった</li> </ul>
全体に関して	<ul style="list-style-type: none"> <li>知識がまったくないことに気づかされた</li> <li>まだまだ知らないことが多い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>まだまだ知識不足</li> <li>全体的にまだ理解が不十分</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>知識がまだまだ足りない</li> <li>まだ勉強不足</li> </ul>	
分からないところの具体化	<ul style="list-style-type: none"> <li>分からない単語が多かった</li> <li>質問の内容が高度</li> <li>発達障害への知識が低い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>指導の実践と計画の項目が悪い評価だった</li> <li>教職に関することは自信がない</li> <li>理論に関するところが勉強不足</li> <li>支援の方法が身についていない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発達の過程とその他の障害、児童生徒との関わり以外の項目において評価に大きく差がみられた</li> <li>特別支援教育に関する知識が身についていない</li> <li>障害児教育が説明できにくい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>実践に関する領域が低い</li> <li>「職務の自覚と遂行」について不十分</li> <li>指導の計画・授業実践」が自分で思っているより足りていない</li> <li>授業実践に関して、教育実習で授業をして反省点が多く、まだ不十分だと感じた</li> <li>職務の自覚と遂行についてはまだ十分ではない</li> <li>児童とのかわりでは、授業で学んだことが、児童を前にすると、実践できていると考える</li> <li>特別支援教育全般に関すること、理念と制度についてはあまり出来ていなかった</li> </ul>
理解の困難さ	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分がどこまで理解しているのかわからない</li> </ul>			
理由の省察	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分に自信がないことが原因</li> <li>入学してから自分にとだけ力がついていたのか見当がつかない</li> <li>下手に先入観などを持つことを避けるためそれほど深くはしていない</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>「指導の計画・授業実践」については、気持ちや時間に余裕を持って計画を立てることや十分な準備をして授業を行うことが出来ていなかった</li> <li>児童生徒の実態を把握することが十分に出来ていなかった</li> <li>個人の実態を把握して、授業での的確な支援等を考えるのが難しかった</li> <li>障害児教育について知れば知るほど、自分できてるのかという不安が反映された</li> <li>教育実習を経験して、教師としての自覚をもつてかわることができなかった</li> <li>さまざまな知識があるが、整理できていなかったことが原因</li> </ul>

表2 今後に関するコメント

	1年生	2年生	3年生	4年生
ポートフォリオの活用に関して		<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分を客観的にみる事ができた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・この結果(ポートフォリオ)はこれからの学習のよい目安になる</li> <li>・今の自分に足りないものを理解できた</li> <li>・評価を高くしたい</li> <li>・自分の知らないところ、力がついてきていることを知り、自信がついてきた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ポートフォリオを通して、自分の課題を見つめなおすことができてよかった</li> </ul>
今後の取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もっと勉強して多くの知識を身につけたい</li> <li>・積極的に子供たちと触れ合う機会を作っていきたい。</li> <li>・今後も一層精進したい</li> <li>・たくさんのお話を聞きたい</li> <li>・資料を集めて勉強したい</li> <li>・さまざまな分野を広く学んでいきたい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これからの講義等を通して学年があるにつれて知識がついてきたことを実感する→自信につながるのだから</li> <li>・知識や理解を深めて、自分がどの段階までできているか把握したい</li> <li>・自信がつけられるような活動(行動)を心がけていきたい</li> <li>・まず自分がどれくらいの知識を持っているかを知る</li> <li>・知識に関してはまだまだ学び、自分の力にしていかななくてはと強く思った</li> <li>・これからの専門講義などをただ受けて終わりではなく、自分なりに深めていけばと思います</li> <li>・指導の実践と計画に力を入れて学習に励みたい</li> <li>・もっといろいろな事を学んで、知識を埋やす</li> <li>・授業以外にも学習の場を広げて、スキルアップに努めたい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・理論的なことをもって学ぶ</li> <li>・大学生活の中で専門性を身につける</li> <li>・たくさんさんの経験と勉強</li> <li>・様々なことを学んでいこうと思う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実践後には反省をしつかりする</li> </ul>
今後の抱負		<ul style="list-style-type: none"> <li>・まだ2年生で時間があるのでがんばりたい</li> <li>・これからの大学生活で頑張っていきたい</li> <li>・もっと自信を持って教職を目指したい</li> <li>・自分に自信がもてるように頑張りたい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知識をつけることが必要</li> <li>・理論と実践、どちらも偏りのないようにしたい</li> <li>・自信を持てるように頑張りたい</li> <li>・自信を持って説明できるようにしたい</li> </ul>	

結論として、3,4年生は、講義を通した理論的知識の積み上げである「知る」ことと、教育実践を通した経験知の積み上げである「生かす」ことと、省察を通した自己点検と課題の発見・解決である「気づく」ことを経験しつつあるように考えられた。

学生のコメントから、エスメ・クロード (1999) のポートフォリオ評価の特徴である「自尊感情や自己効力感を高める」状況がみられたが、これはすなわち、学生がオンライン・ポートフォリオによって、特別支援教育教員の資質向上に向けて意欲的に取り組めることが推察できる。

したがって、本研究の取り組みが、講義を通した理論的知識の積み上げである「知る」ことと、教育実践を通した経験知の積み上げである「生かす」こと、そして省察を通した自己点検と課題の発見・解決である「気づく」ことを往還させることを可能にし、これらを常に自ら点検し、向上に努めることができるメタ水準の資質の育成に効果的であることが考えられた。

#### 4. 総合考察

本研究で明らかになったことは、以下の二点である。

①オンライン・ポートフォリオを通して、学生自身にとって、自己の到達度を見つめる機会になった。

②学生支援員の取り組み(甲斐・片岡・雲井・内田, 2009)など実践的体験を通して、理論と実践を往還して「自ら向上し続ける教員」へと成長することが期待された。また、養成をする側である教員スタッフも、学生一人ひとりの状況や考えを、より具体的に把握するようになった。

石塚・佐藤(2006)は、学生ひとり一人がどのように成長したかそのプロセスが一目瞭然となり、教師と学生が一緒に評価することで、従来の教師主導の一方的な評価から、コミュニケーションという相互作用をとおしての共同評価となると述べている。そもそもポートフォリオは学生の自尊感情や自信、学習意欲を育み、自己評価や他者評価という対話を通してメタ認知能力をつけるのに有効とされているものであり、このことから

も、本研究のオンライン・ポートフォリオは、特別支援教育教員としての技能や知識の現状や伸びなどを評価することを可能とし、自己成長へのモチベーションアップとしても価値があることが示唆された。

しかし、本研究では、オンライン・ポートフォリオ実施後、コーチングを行ったが、そのコーチングが適切な指導や支援をするために有効であったかどうかはまだ検証されていない。

今後は、教員スタッフにとっても適切な指導や支援をするためにオンライン・ポートフォリオが有効であるかどうかを検証していく必要があるだろう。また、それぞれ学生が見つめた自己の到達度の内容についても明らかになっていない。そして、一度限りの取り組みではなく、定期的に取り組んだ結果どのような成果が見られたのか、卒業後も自己点検が行われているかどうかといった、縦断的な調査も不可欠であろう。

今後は、オンライン・ポートフォリオの運用をどのように大学の中のカリキュラムの中に位置づけていくか、「教職実践演習」との関連付けも含めて、検討していくことが重要である。

#### 謝辞

ご協力をいただきました、A大学教育学部特別支援教育教員養成課程の学生の皆様に心から感謝申し上げます。

#### 参考文献

- エスメ・クロード (1999) 教師と子どものポートフォリオ評価。鈴木秀幸訳 (1999) 論創社, 11-16。
- 福森護・松田文春 (2005) 福祉と特別支援教育の接点に関する考察-教員の長期社会体験研修における事例を通しての考察-。中国学園紀要, 4, 15-21。
- 市川洋子・貫井正納 (2002) 子どもの自己評価の変容-ポートフォリオ評価を取り入れた総合的な学習を通して-。千葉大学教育学部研究紀要, 50, 57-67。
- 石塚淳子・佐藤道子 (2006) ラベルワークを用いたポートフォリオ評価法の試み。聖隷クリス

トファー大学看護学部紀要, 14, 63-72。

鹿児島大学・琉球大学・鹿児島県教育委員会・沖縄県教育委員会 (2008) 生きる教師力を育む特別支援学校教員養成～オンラインポートフォリオによる理論・実践の融合と個別的修学プログラムの構築～中間報告書。

甲斐更紗・片岡美華・雲井未歆・内田芳夫 (2009) 学生支援員の活用状況とその効果－A地区のアンケート調査の結果より－。鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 19, 255-261。

片岡美華・田中敦士 (2008) 特別支援教育教員の専門性－学生の意識調査の結果からみた現状と課題－。日本特別ニーズ教育学会第14回大会発表要旨集, 70-71。

宮崎英憲 (2008) これからの特別支援教育に求められる教員の資質と養成について。障害科学研究, 32, 216-217。

田中敦士・神園幸郎・緒方茂樹・大沼直樹・片岡美華・雲井未歆・内田芳夫 (2008) 特別支援教育の教員養成課程で学ぶ大学生の学習態度と技能習得の実態～琉球大学学生への質問紙調査結果から～。琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要, 10, 31-40。